

最近、イエスの家族をめぐる問題があらたに浮上してきている。

イエスは死後もなげ、原始キリスト教団において神の子とされた。そのため聖母マリアの処女懐胎や無原罪、さらには「養父」ヨセフの血筋や役割が神学の祖上にてせられた。また15世紀後半以降、マリアと幼児イエスとヨセフの3人からなる「聖家族」が理想の家族像としてもはやされるようになった。こうした変遷は教会堂の画像や彫刻に如実に反映されている。

しかし、19世紀以降、福音書や画像のなかのイエスは、なく、史的イエスの実像に文献学や歴史学、考古学などのメスが入るようになった。科学的、合理的な観点からイ

イエス伝説

れたので非神話化がはかられたのである。四つの福音書すみ、どを福音史の研究もすのような資料からいつ頃どれたかなる図のもとに編纂されはじめた。さびしく検討され採用された。また新約聖書に見もつた。なかつた外典の発見イエス像だ。それにもどうたに描かれた。マリア像があらたに描かれるようになった。たことさるようになった。三氏は「新約聖書の田圃」なかに逆転エスという男のイエスを法的反逆者としてのマとユダヤ写している。ローラ男は「一神教の支配に反逆する」などといふ者は幸いである抵抗をい放ち、逆説的その鋭さをこらめた。しかもいたのは、まのよく理解してしう、とり親手たちよりもむき者の女たちでは

カミ・ホトケほどこへ③ 中牧 弘

なかつたかた。弟手たちは。その現場に姿をみせず、その屋合わせたのは女たちだけ。そのなかにアもいた。回。彼女を充満。愛もな。は彼女を罪の。に都合の。あけたとも。実は、そのマ。アによる福音。2世紀のはし。

典であるが、19世紀後半にコプト語訳の断片写本がエジプトで発見された。そこでのマリアは弟子のペトロたちを尻目にのりしく宣教に旅立っている。また1976年にギリシャのアトス山で発見された

『フィリボ言行録』によると、ギリシャ語でマリヤムネとよばれたマクダラのマリヤは使徒フィリボの妹であり、宣教に尻込みする兄を勇気づけ、男装して兄にしたがっていく女傑でもある。



版画・田主誠

考古学や科学伝説にメス

マリア

くわえて、考古学的発見も見逃せない。1980年にエルサレムで発掘されたタルピオットの墓には10個の骨櫃が収納されていた。遺骨をとりだしておさめた二次葬の骨であるが、銘には「ヨセフの子、イエス」、ヨセ(ヨセフ)の短縮形か、マリア、「マラ」として知られたマリヤムネ、「アエスの息子、ユダ」と読めるものがある。最近邦訳された『キリストの棺』によると、これはキリストとその家族である蓋然性が高いという。マラ(師)として知られたマリヤムネは使徒となったマクダラのマリヤのことだろうか。「イエスの息子、ユダ」はマリヤムネと

の間にもつけた手であろうか。棺の底に付着していたわずかな骨片のDNA鑑定によると、イエスとマリヤムネは血縁関係にないという。2人が両親かどうかは息子ユダのDNAが鍵をにぎっているが、残念ながらユダの棺には残存物がない。

『ダ・ヴィンチ・コード』はフィクションだが、謎めいたイエスの家族とくにマクダラのマリヤについての関心を刺激した。『キリストの棺』はドキュメンタリー・タッチではあるが、一族の墓の存在を吟味するきっかけとなった。いずれにしろ、2人のマリヤから目が離せなくなっている。フェミニスト神学者ならずとも。(国立民族学博物館教授・宗教人類学)